

アメリカの底力

私から見たアメリカ人は合理的で且つ個人主義的な性格を持つ民族であると紹介して来た。合理主義だから、彼らの考える事も単純で且つ楽天的であり、諦めが早いのも事実である。しかし自分を犠牲にしてまで他人を助けようとはしない。合理主義であるから人間の義理と云うものは余り深く考えない民族である。余り遠い将来も考えないし、然るに金銭的な蓄えは少ない。良く聞く言葉であるがアメリカ人は常に借金に追われているのである。家と車に殆どのアメリカ人はその支払いに追われているのである。それでも、休暇は取り、人生を楽しもうとするのがアメリカ人である。最近では家と車の支払いに加えてクレジット・カードの支払いに追われているのである。クレジット・カードには不動産の様な担保が付いていないから、クレジット・カードの使い過ぎで個人破綻する人も多い。貯蓄が少ない民族であるから、現今の様な経済不況時には結論として、失業率が上がって、家、車、クレジット・カードに対する支払いが出来なくなる市民が多くなると、個人破産、そして倒産する銀行が多くなる。これが今日のアメリカである。

しかし国家としては、国体の維持として強力な軍事力は維持しなければならないし、アメリカは無法なる侵略者に対して異常な程の決意があるのだ。9.11 大虐殺は良い例である。いずれ、アメリカはアルカイダと何らかの共存の道を見つけるだろうが、それはアメリカ本土に直接攻撃の道が皆無になった時点でそうなるのであって、それまではアメリカの戦いは続くと私は確信している。

アメリカは日本の真珠湾攻撃で 2,400 人のアメリカ軍人犠牲者を出した。その報復として何十万と云う人命犠牲を払ってまでも第二次世界大戦を克服した国である。9.11 大虐殺は 3,500 人の一般市民の人命を失ったのだ。アメリカはこの為に如何なる犠牲をも惜しまないと私は思う。ただ悪い事に、アメリカはどちらの政党が政権を取っても基本的な政策には変動がない - 故に戦いは続く。加えてアメリカ人は勝利を愛する国民でもあるのだ。アメリカは侵略国であると良く聞くが、歴史的にアメリカ建国時代から他国を侵略した事はないからこの批評は皮肉である。私の解釈ではあるが、侵略とは国際法に違反して他国を武力にて侵略し、その国体を占領し、植民地化する事である。付録が付いているとは言え、アメリカは沖縄諸島の主権を日本に返還した。しかし国後島や択捉島に日本の国旗がたなびく日が来るのだろうか？

国際的にアメリカが非難を浴びる事は多い。しかしながら世界中の如何なる国がジタバタしても絶対にアメリカに勝てないものがある。それはアメリカは大農業国である事だ。アメリカで生産される穀物、他の農業生産物はアメリカ国内の全人類を施して、尚且つ余剰が出る恐るべき農業大国である事だ。これを理解せずして本当のアメリカを理解する事は出来ない。かと言ってアメリカは福祉国家ではない。基本的にアメリカの政治家は国体は政府が造り、維持し、国民がその中に生存すれば良いと理解しているのだ。したがって母子家庭補助金等ない。学童児補助金なるものもない。学童児がいる家庭に補助金を与えて果たしてその補助金のどのくらいが学童児の為に費やされるだろうか等、考えなくとも明白であるからである。故に高校までの教育費は完全無償にしているのだ。

親の懐にはビター文として直接給付されない。又母子家庭の存在は結論として国の責任ではない。夫無しで母子家庭が生ずる事はあり得ないからである。しかし、福祉援助の道はいくらでもあるので、その適用を受ける事は出来る。アメリカの政治家は国家は国民（大多数の）が自由に生活していく事が出来る組織を作るのが責任であると考えており、それをいかに適用するかは国民にかかっていると理解してるだけのことである。無条件で、不公平に、無償で恩典を与えるような事はしない。それを無理して施行すると、結末として、膨大なる国債発行、納税者の負担となるのが落ちだからだ。

私は先の寄稿の中で、極めて稀ではあるが、親子が『親離れ』、『子離れ』出来ずして、気付いたら子が一国の首相になったエピソードを披露した。又、諸々の一般庶民の苦労も知ることなく親の富豪ゆえ大統領になったエピソードも披露した。私はここでアメリカ第16代大統領のエピソードを紹介したい。

アブラハム・リンカーンが大統領選挙戦中、イリノイ州のある農村地帯を遊説中、起こった実話である。9月、農夫たちが麦畑で刈り入れ中、通りかかったリンカーン候補に尋ねた。

『お前さんは大統領になりたくて良い事ばかり言っておられるようだが、私達農夫の仕事のほんの少しでも分かっているんですか？』それを聞いたリンカーンはその農夫に近づき、

『その鎌を貸して下さい』と言うや、大勢の農夫たちの見ている前で、僅かの時間に山となるほどの麦を刈り取ったのである。『論より証拠』を見せつけられた農夫たち、このエピソードはアメリカ全土に広まった。アブラハム・リンカーンはアメリカ第16代大統領に選ばれたのである。『労働なき富』を非難し、『貧富』の身分から、人民による政権を訴えて選ばれたインドのガンジー首相、農家の貧乏暮らしから苦学の末弁護士資格を取ってやがて大統領に選ばれたアブラハム・リンカーン、しかし日本の国家指導者たちにこの様な『論より証拠』を見い出せないのは残念な事である。これが又、アメリカ人に流れている血潮を感じる一つなのである。

アメリカは合理主義国家であると私は前述した。然るにアメリカは又契約国家でもあるのだ。契約は約束であるからこれは施行せねばならない。国家使命はここに存在する。それはリンカーン大統領が言った『人民の人民による人民のための政治 - Government of the people, by the people, for the people』の言葉に他ならない。1929年、アメリカは経済大恐慌に遭遇した。時のルーズヴェルト大統領はその恐慌克服の一環としてテネシー河流域開発 TVA と称し数々のダム建設に膨大な投資を行い、失業対策と洪水防止、電力増大を計った。いわゆるニューデール政策であるが、まもなく第2次世界大戦が勃発したので、この効果は判定出来ないが、国を挙げてのこの膨大なる契約、アメリカはやってのけた。70%、80%完成に近い国家事業を中断する様な不経済な、愚かな事はアメリカはやらない。それは国民に対する契約不履行であり、不合理であるからだ。

私は帰国一年、私の目から見た日本は、未だ外見的ではあるものの、日本は不合理大国と見た。事なかれ主義が舞い散る日本のお役所、年功序列が幅を利かす日本の公共団体、

不合理な慣例主義が君臨する日本社会、半ばやくざ組織的な日本の政党派閥政治、経営監督監査に乏しい日本の公共行政、それに気付かない日本庶民（有権者）、私は唾然としてる。

又、最近日本政府は膨大な公金にて贅沢三昧なる『JAL』の経済救助に踏み切った。しかしアメリカも同じ様な事をやっている。連邦政府が乗っ取った大手自動車工業（GM）をメンツにかけてもその復興は必至である。外国資本のトヨタはそれに引っかかった、とアメリカを知る私は見た。その環境が『飛んで火に入る夏の虫』と言えば皮肉に聞こえるだろうか？トヨタの販売数激減がGMの復興に及ぼす効果は確実である事は明白だからだ。しかし反面、それが国際的に出来るアメリカ、軍事力を使わずともそれが出来るアメリカ、これがある意味ではアメリカの底力であるのかも知れない。

しかし数年前、ドイツ製高級車である Audi がアクセル故障の為数多くの犠牲者がアメリカで出た。一例を挙げると、ある牧師家庭の Driveway から前方に始動するはずの Audi が突如もの凄い勢いで後退し、車の後方に立っていた息子を跳ね飛ばし、且つ家を突き抜けて裏庭にあったプールに飛び込んでやっと止まった。この事故でこの息子は亡くなった。Audi は事故の原因を究明し、全米に車のリコールを行なって部品を交換し将来への事なきを施したが、アメリカ連邦政府は公聴会の場で Audi 責任者を追及しなかった。何故トヨタがこの的になったのかは私が言うまでもあるまい。

反面、他のドライなアメリカも忘れてはならない。アメリカは日本への礼儀を忘れて突如中共（現在の中国）と国交を結んだ、いわゆる『ニクソン・ショック』である。又、アメリカは一時世界の空を君臨した、『パンアメリカン』航空を倒産させた。日本が『JAL』を凍死させなかったのとは対照的である。